

I. ガイダンス

I-1 序論 存在と場所

「およそあるものはすべて、どこか一定の場所に、一定の空間を占めてあるのでなければならない」。

プラトン『ティマイオス』

→ カントのデカルト批判以来、近代哲学は《存在》を《場》をとともなうものとしてきた。

→ カント＝ニュートンの《絶対時空》。存在に場が先立つ。存在の**定住性**を前提。

空間：「空間という純粹直観は、感官や感覚などの対象が実際に存在していなくても、我々の意識における単なる感性的形式として、ア・プリオリに成立する」。

時間：「時間表象がア・プリオリに根底に存しないならば、同時的存在もまた継的存在も、知覚されることすら不可能であろう」。

カント『純粹理性批判』

これぞ二度都へ帰るべくもしがたし。いざ^{かどいで}途首の酒よ」と申せば、六人の者おどろき、「ここへもどらぬとは何国へ御供申し上ぐる事ぞ」といふ。「されば、浮世の^{いづく}遊着・^{しらびやうし}白拍子・^{なほれめ}戯女見のこせし事もなし。我をはじめてこの男ども、ここに懸る山もなければ、これより女護の^{つかみ}嶋にわたりて、^{ゆきがた}みどりの女を見せん」といへば、いづれも歎び、「譬へば^{じんぎよ}腎虚してそこの土となるべき事、たまたま一代男に生れての、それこそ願ひの道なれ」と、恋風にまかせ、伊豆の国より日和見すまし、天和二年神無月の末に行方しれずなりにけり。

井原西鶴『好色一代男』

→ 世之介はこの世界に居場所を得られず海に消える。居場所なき者たちは不在なのか？

I-2 存在と関係

数学を量的なものと思なす考えを捨てないといけない。数学は本来的に「関係」を扱う学問です。量はその一つにすぎない。

……特に数学的思考というべきものはない。「関係」を考えることなら、すべて数学的である。言語体系も政治的組織も精神病理も、それが関係の形態であるかぎり、数学的に扱えます。

……プラトンは、「関係」は、感性的なものと区別されるアイデアとして、アイデア界に在ると考えたわけです。今そんなふうを考える人はいないけれども、この区別そのものは残ります。「関係」は、物があるというのと違ったふうに、存在する。あるいは、それは無であるともいえます。なぜなら、それはどこにも存在しないからです。

柄谷行人「なぜ数学か」

→ 存在に優越する関係。ひとは関係のなかではじめて存在価値を覚える……。

→ 利他主義から社会学へ（オーギュスト・コント）。

存在者は相対的に硬い、芯とでもいうべき層と、その周囲に相対的に柔らかく、流動的な、こういつてよければ液状の層をもち、水が周囲の地形によりそって形をかえるように、われわれの精神や肉体は周囲の他者によりそって形をかえる（硬い芯のことを、われわれはしばしば「主体」といいかえている）。存在者にとって、他者はおのれの臨界を意味し、ときに相互に浸透し合い、それどころか相互に形をかえさえる。

存在の主題において、アトム状の個人と個人とを結ぶ架空の線、すなわち「関係」が設けられることはない。ましてや「関係」が個人に先立つこともない。存在以外の別のなにかを考慮せねばならない時点で、どうしても存在の主題から離れてしまうからだ。「関係」なるものを中心にこの世界を考えることの難点は、一方が他方を破壊、ないし飲み込むような状況を説明するのが非常に困難になることである。そこでは、そうした力を「暴力」として、自己同一的な二項および両者の「関係」を維持する環境の外に、ひとことといえば反-法の世界に放逐するしかなくなってしまう。だが、それは人間本来の歴史から遠ざかることでもある。恋愛や戦争がそうであるように、双方を身体のみならず精神においても——したがって相対的に硬い芯の部分をも——変形させない交流などありえないし、大水が周囲の地形を飲み込んでしまうことが、本来の水にとって反-法的なはたらきであるのでもない。水が大水と非難されるのは、以前と同じ環境・同じ関係を維持したい司法的な人間の都合にすぎないし、政治と戦争のいずれを手段／目的の側に置くにせよ、両者の境界を判別するのは、ほんとうは、ひとが思っているよりもずっと困難なのである。

田中希生「存在の歴史学のためのプロレゴメナ」